



説教要旨 「イエスとは何者か」

ルカによる福音書9章7～17節



イエス様の噂は、当時ガリラヤを支配していた領主ヘロデの耳にも入り、ヘロデはこの噂の主であるイエスとは「いったい何者だろう」と言っ、イエス様に会ってみたいと思ったのです。それはヘロデだけの思いではなく、イエス様の噂を聞いた多くの人々もヘロデと同様の思いを抱き、自分の目で「イエスとは何者であるのか」を確かめようとイエス様の所へと押し掛けるのです。

そうしてやって来た人々をイエス様は迎え入れ、彼らにみ言葉を語り、癒しました。そして日が暮れた時、イエス様は使徒たちに「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」(13節)と命じられました。しかし使徒たちの手には、パン五つと魚二匹しかありません。五千人以上の群衆の前では、ほんのわずかの腹の足しにもならない。それが、使徒たちの持っているもの、使徒たちの力の現実です。しかし、イエス様は彼らの力ではそれができないことを確認した上で、「五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで、それらのために賛美の祈りを唱え、裂いて弟子たちに渡しては群衆に配らせた」(16節)のです。その結果、すべての人が食べて満腹したどころか12籠ものパンが余ったというのです。

この出来事には、ヘロデが抱いた「イエスとは何者か」と言う問いに対する一つの答えが示されています。弟子たちはこのことを通して、イエス様が、自分たちをも含めた多くの人々の空腹を満たし、その命を養い育て下さる方であることを体験しました。しかもイエス様はその奇跡を、弟子たちの持っているものを用いて、また弟子たちの手を通して行なって下さいました。彼らが持っているものなど、何の役にも立たない、無に等しいものであったのに、主が用いて下さることによって、多くの人々を養い、育て下さる恵みの食事の材料となったのです。また弟子たち自身は何の力もない者たちであるのに、イエス様は彼らを、多くの人々を養う恵みの食事の給仕として用いられたのです。イエス様とは、力なき私たちをみ業のために用いてくださり、肉体的にも、精神的にも養ってくださる方なのです。

